

愛を語るというタブー

Dante とロマン主義の詩における言葉を語ることの意義

後藤美映

Dante の『神曲』地獄篇の第五歌には、『神曲』の中でも絶唱の一つとして有名な Francesca と Paolo の愛の物語が挿入されており、「愛が私たち二人を一つの死に導いた」と Francesca の語りを通して歌われる。そして、Francesca と Paolo は、Lancelot と Guinevere の物語を二人で読むうちに、その物語の一節に「負けた」という、愛の情熱が持つ誘惑の力を語ってみせる。しかし、『神曲』では、Francesca と Paolo は不義を犯した罪で地獄の圏谷で断罪されており、二人の愛は、理性よりも欲望に囚われたとして、その罪を問われている。

この不義の物語は、ロマン主義時代に、Leigh Hunt、John Keats、George Gordon Byron らによって、宗教的倫理よりも愛の情熱を謳歌する物語として改作され翻訳される。そこには、宗教的教義よりも人間精神の自由を奉じる、ロマン派の詩人らの意識的な誤読による読みの手法が存在する。本発表では、Francesca の愛についての語り、ロマン派の詩人らによって禁忌を解かれ、どのように代弁されるかを考察しながら、詩において使用される言葉を通して達成されようとした詩人らの美学的、社会的改革の試みについて論及する。

イギリスにおける Dante の受容の背景を繙けば、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてのロマン主義時代において、その評価は頂点を迎える。ロマン派の詩人たちは、特に、『神曲』の地獄篇第五歌の Francesca と Paolo の愛のエピソードに魅せられた。Dante の興隆に悼さすことになる Henry Francis Cary の訳では、地獄の第二の圏谷は「光がまったく黙するところ」、つまり、理性の光が曇り、闇が支配するところと定義されている（平川 122）。しかし、この第二の圏谷で Francesca が語る愛の物語は、「愛」そのものが主語となった文体が示す通り、「愛」が主体となって二人の運命を導き、愛の虜とならざるを得なかったという受動性を強調する。興味深いのは、愛が人間を翻弄するという愛の形は、中世の Andreas Capellanus が著した『宮廷風恋愛の技術』において語られる愛の定義そのものであることである。すなわち、Francesca の語る愛は、宮廷風恋愛における愛のアレゴリーを引用し、中世ロマンスの枠組みを用いた物語となる（Rabogliatti 110-11）。

一方、神学の観点からは、Thomas Aquinas が『神学大全』において説いたように、姦通は肉欲によるものとみなされ、道徳的な罪である（219）。したがって、『神曲』では、キリスト教の教義に沿って不義の愛を道徳的な罪として表現している。しかし、Francesca の宮廷風恋愛に基づく愛についての語りは、Dante が哀れみを感じて昏倒したように、神学ではなく、Dante の詩として解釈されるべきものであり、神学と、それと対立する詩という二極化された視点の振幅が生じる。すなわち、二人の愛を、罪と見なすか、人間性の自然な在り方と見なすかという、相対立する二つの視点が、『神曲』には存在していることになる（Levine 51-54）。

さらに、Francesca の語りの口調は、上流階級の貴婦人を思わせる優雅さを持ち、具体的な事の次第を、生きていた地上を舞台に再現し、聞く者の情動を揺り動かし、魅惑する。また、Francesca はその語りの中で、Paolo の名をはっきりと口にすることなく、「彼」として言及し、明言を避ける。こうした曖昧さが、1960 年代までのイタリアの批評では、淑女らしい慎ましきとして見なされていたように、Francesca の語りは、いわば、聞く者の心を惑わす要素を多分に含んでいる（Noakes 222）。このように、Francesca の語りは、Dante のテキストにおいてすでに、キリスト教の教義を転覆させる可能性を孕んでいると解釈することができ、ロマン派の詩人たちを熱狂させることになるのである。

1816 年に出版された Hunt の『リミニ物語』（*The Story of Rimini*）は、Francesca の 50 行ほどの語りを 4 編よりなる約 1700 行にわたる物語として改作したものである。Hunt は序文で『神曲』を「全体に憂鬱な物語」と呼び、Dante の「神学の大系」を「不条理」とし、Francesca と Paolo の「愛情という一つの純粋な衝動」こそが、詩の題材に相応しい感情の美学を有すると考える（165）。したがって、Hunt は、愛のエピソードをキリスト教の教義の体系のうちにある理性の庭ではなく、快楽の庭の中で展開される中世のロマンスとして改作する。そして、愛を語るための言葉は、「日常生活の言葉と何ら異なることはない」とし、言葉の「価値は、詩が訴える力と感情にかかっている」と定義する（167-68）。すなわち、Francesca の物語は、宗教的倫理という枠組みからは完全に解き放たれ、ありのままの人間の物語として、日常において用いられる言葉によって再生されたといえる。

Hunt の説く「実際の、存在する言葉」は、Wordsworth が『抒情歌謡集』の序文において掲げた、日常において民衆が使用する、より平易で力強い言葉と共鳴する（168）。しかし、Wordsworth が新古典主義的詩作の英雄対韻句が旨とした規則性や端正さを打破するために、ブランク・ヴェアースを採用したことは異なり、Hunt の

『リミニ物語』は二行連句を用いる。政治的な保守主義へと帰した Wordsworth に異を唱え、Hunt は敢えて二行連句を使用し、新古典主義的詩作の「統一された規則性」に対して、「自由な韻律の精神」を描出してみせる (167)。すなわち、Hunt の改作は、キリスト教の教義を侵犯する、愛という感情を自由に歌い上げる美学を唱え、さらに、反古典主義の韻律を通じて、政治的、美学的革新性を呈示しているのである。

Keats は Francesca と Paolo の愛を、「かつてヘルメスが軽やかに飛び立ったように」(“As Hermes once took to his feathers light”) というソネットにおいて歌う。詩の背景として、Keats は Dante の地獄について自分自身が見た夢を詩として表現したとして、夢という vision から詩を説き起こし、Dante の『神曲』と同様のスタイルを取る (Letters 2: 91)。ソネットの特徴の一つは、まず octave の導入部分で、キリスト教にとっては異端となる、Argus と Hermes、Io と Jove をめぐるギリシア神話を直喩として引用することである。キリスト教の神学において、教義を語るための言葉は、理性的で簡明な論理が必要である。しかし、詩における直喩という修辞は、言葉の恣意的な意味の拡張を助長し、意味の解釈は想像力に委ねられる。神学における論理性においては、そうした想像的、恣意的な言葉は、排除すべき不安定な要素を孕むといえる。したがって、ギリシア神話の異端の物語が比喩によって語られる時、Dante の神学は、Keats によって想像的な詩として語り直される。Keats は叙事詩や物語詩ではなく、ソネットという詩形によって、キリスト教を無効にし、その比喩的言語によって、意味の革新性と創造性を呈示したのである。

また、Keats のソネットが保持する革新性は、地獄の場面において物語を再現することにある。Keats の地獄においては、Francesca は抒情的な語りをすることもなく、詩人のペルソナである “I” と口付けをするという、快楽が演じてみせられる。ソネットが描く地獄は、罰を受ける場所ではなく、慰めを得るための場所であり、欲望は罰せられることはなく、欲望の成就がなされるという、キリスト教の体系を破壊するラディカルな筋書きが呈示される場である。Keats の改作は、“melancholy storm” という愛の物語を、ソネットという詩の “form” によって生み出すという、言葉による美学的、宗教的闘争を示しているといえる。

Hunt の『リミニ物語』を大いに称賛した Byron も、Francesca と Paolo の件を、Dante が用いた *terza rima* を敢えて使用して逐語訳を試みた。Byron にとって、二人の物語は、自分と異母姉弟の Augusta Leigh との、あるいは、ラベンナの出身の Teresa Guiccioli 伯爵夫人との不義の恋愛を想起させるものであると言われている (Beaty 397-98)。Byron は、可能な限り Dante のイタリア語の字義に忠実な訳を試みたが、翻訳には Byron が自分自身を投影したと考えられる語句が使用されている。例えば、Dante のイタリア語では、「あの方」と代名詞によって呼ばれ、名指しされずにいる Paolo は、Byron によって、“such a fervent lover” と訳出され、その「熱烈に愛する人」は、Lancelot、さらには Byron 自身をも暗示し、愛の物語の変奏を表出させることになる。こうした Byron の翻訳は、ロマン派の詩人たちが、愛を語ることの禁忌を愛の讃歌へと変容させるという美学的革新性を示すだけでなく、愛の物語が、詩人の自己という確固たる視点によって構成されるという、詩人の自律的存在の意義をも示唆しているといえる。

そもそも Dante は、故郷のフレンチェを追われて亡命生活を送った政治家でもあり、19 世紀初頭においてイタリアという国が専制政治への抵抗と独立を象徴する国となった時、自由主義的思想を信奉したイギリスの詩人たちにとって、Dante もまた抵抗と独立の象徴となった。すなわち、こうした政治的、社会的状況を鑑みたとき、Hunt、Keats、Byron における恋愛詩は、Dante という文学的遺産を用いた、悲恋をかこつ単なる嘆息では終わらず、それは宗教的、伝統的規範を逸脱する自己を謳歌し、イギリスの美学的政治的な改革を唱える歌であったといえるのである。

引用文献

Beaty, Frederick L. “Byron and the Story of Francesca de Rimini.” *PMLA*, vol. 75, no. 4, 1960, pp. 395-401.

Hunt, Leigh. *The Selected Writings of Leigh Hunt*. Edited by John Strachan, vol. 5, Routledge, 2003.

Keats, John. *The Letters of John Keats, 1814-1821*. Edited by Hyder Edward Rollins, vol. 2, Harvard UP, 1958.

Levine, Peter. *Reforming the Humanities: Literature and Ethics from Dante through Modern Times*. Palgrave Macmillan, 2010.

Noakes, Susan. “The Double Misreading of Paolo and Francesca.” *Philological Quarterly*, vol. 62, no. 2, 1983, pp. 221-39.

Rabogliatti, Katherine, and Wellesley College. “Within Reason’s Garden: Dante Alighieri and the Redefinition of Courtly Love.” *Dies Legibiles Undergraduate Journal of Medieval Studies*, vol.1, 2021, pp. 109-16.

アクイナス、トマス『神学大全』服部英次郎訳、世界大思想全集第二十八巻、河出書房新社、1997 年。

平川祐弘『ダンテ講義』河出書房新社、2010 年。